



sousei akita

曹 青 秋 田

2011.3 第70号 秋田県曹洞宗青年会

- * この2年間を振り返って
- * 第5回「祈りの集い」 報告
- * 第28回「随聞会」～ 絡子を縫う～ 報告



二年間を振り返って

秋田県曹洞宗青年会会長

明 石 浩 延

早いもので二年間の任期も終わろうとしています。思えば十四年前に鱗勝院御住職三浦昌彦老師が会長の時に会計を勤めさせて頂き、その後七期に渡り秋曹青に関わってきました。このお役に就く時には多くの方々から励ましのお言葉を頂戴しました。鱗勝院様には「やりたくてもやれない人もいるのだから頑張らなさい」と言われました。初めはその意味が理解できず、「こんな大変な事をやりたい人なんていない訳がない」と思っていました。しかし本意はその巡り合わせに出会わなければできないお役目なのだから頑張らなさいという事なのだと思いが付きました。また蔵伝寺様には「そいつに要請があった時には、断る事なく受けなさい。やってみな

くは分からない事もあるのだから」と言われました。確かに事業も思った通りには進まず、絡子を縫う』に関しては三回で終わる予定が六回になってしまった事は、やってみて経験できた失敗でした。この事で講師の蔵伝寺様や会員の皆様には大変ご迷惑をお掛けした事を心よりお詫び申し上げます。そして田中裕憲師には「この任に就く数年前から次に中央に回って来た時は浩延さんが会長だから私が事務局をやらせてもらいます。」と心強くありがたいお言葉を頂きました。皆様のお言葉を支えとしてなんとか二年間勤める事ができた事を感謝申し上げます。

また全曹青や東北地協といった他県の曹青会の活動を見る機会を頂いた事は大変ありがたかったです。他の曹青会も素晴らしい活動をしているなと感じながら、秋田は秋田のスタイルでしっかり活動しているんだと改めて感じる事ができました。会員の皆様には頼りない会長で大変申し訳ありませんでしたが、私としましてはこのお役を頂いた事はありがたく、ただただ

では苦しいです。

今期私とした仕事としては「ホームページ般若のリニューアル」「寺院情報サイトSangaの構築」「オンラインショップの構築」「ネット上会議室のリニューアル」「広報誌souseiの広告受付担当」が大きな所でした。(中略)広報委員会は広報誌「sousei」の発行とホームページ「般若」の運営をしています。私も企業からの広告受付を担当し広報誌に関わっていますが、souseiは記事の量も多く、また校正も必要なので一ヶ月以上前には入稿締め切り、相当大変です。常にネット上でやりとりがされています。徒然なるままに取り留めなく書かせていただきました。全曹青に様々な思いをお持ちの方もいらっしゃると思います。私も自身を全く知りませんでした。全曹青内部では会員の為になるような事、それを目的に一生懸命に会務を行なっております。社会情勢のせいで、賛助会費が減少傾向にあり、厳しい運営を強いられています。是非皆様のご理解とご協力をお願いしたいと思っております。(＊ホームページより転載)

編集後記

早いもので明石会長から広報のお役を拝命されて二年になるついでです。受けたのは良かったのですが、「さてどうしたものか」というのが本心でした。文才はないし、具体的な方向性もなかったからです。受け継いだ曹青秋田』を見るにつけ秋曹青の歴史やその時々々の事業の数々に改めて感嘆させられました。

まずは自分がやれることから、あまり捉われずにやってみることにしました。年二回発行だったものを、出来るだけ一つの行事が終わって一ヶ月半をめぐりに発行したことです。新しい情報活動を会員はもとより賛助会員の御寺院様に報告したいという気持ちがあったからです。また、編集から発行まですべて自分でやってみました。結果、お陰様で計七回発行することができました。これも、快くご寄稿いただいた皆様のご協力の賜物とこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

二年間誠にありがとうございました。
(工藤範隆 合掌)



sousei akita

曹 青 秋 田

発行所:秋田県曹洞宗青年会
事務局 010-1102 秋田市太平目長崎字本町58 源正寺内
発行責任者:明石浩延 編集責任者:工藤範隆(お問い合わせ先 015-0011 由利本荘市石脇字石脇108-5 石龍寺内)
秋曹青ホームページ <http://www.sousei-akita.net/>

感謝するばかりです。

間もなく次期会長、執行部へと交代するわけですが、代議員さんはじめ会員の皆様で秋曹青を盛り上げて頂く事を願っています。二年間お付き合ひ頂き本当にありがとうございました。

秋田県曹青青年会副会長

久米 弘道

明石会長のもとこの二年間、お袈裟について学ばせていただきました。会長は常々「本山では古参和尚さんに叱られながら、あんなにお袈裟を大切に扱っていたのに、娑婆に帰ってくるなんてあんなに粗末になるのだらう」と言っておられました。なるほど、我々僧侶の代名詞であり正装でもあるお袈裟、なぜ大切に扱わなければいけないのか知らない事が多すぎました。

二十一年度の「弁道会」では、菊地亮道老師の「多々ある宗教の中で衣服まで指示されたのはお釈迦様だけであり、伝衣と功德について示されたのは道元禪師だけで

ある」の言葉にお袈裟の大事を知り、同年

「随聞会」では金子宗元老師の「正法眼蔵」袈裟功德」巻提唱。年度改まり二十一年度の「弁道会」ではお袈裟の研究では宗門第一人者であられる川口高風老師による二日間にもわたる講義を頂戴致しました。スニーカース一つにもなる各宗また歴史的貴重なお袈裟の数々をおしげもなく試着、披露いただきました。そして同年「随聞会」では「絡子を縫う」という貴重な実習を高橋一浩老師講義のもと修行させていただきました。

電話一本で法衣が購入できる昨今、「その一縫いが世界に一つの縫い目だから丁寧な縫いなさい」との師の言葉に信仰の大事をあらためて感じた次第であります。

「お袈裟を大事に」といつ明石会長の佛心が、さらに会員各位の佛道に対する意識を高めた一年だったのではないのでしょうか。

- 大哉解脱服 無相福田衣
- 披奉如来教 広度諸衆生

秋田県曹青青年会福会長

岩 館 裕 章

「二期かの秋曹青の活動は自死、声明、現代布教、児童教化等、具体的なテーマを決めて活動してきました。学びの場が広がり、良い面は沢山あるのですが、執行部始め会員の皆さんの負担が大きいう面もあったように思います。

今期が始まるに当たり、会長が行履を学ぶという基本的な姿に戻って進めたい」と言われた時、素直に「ああ、いなあ」と思いました。もちろん、楽にやるということではありませんし、執行部の負担が軽くなるということもありません。様々な方向を模索し学ぶのは必要なことなのですが、まずその前に脚下照顧といふことなのだと思います。

個人的に感じる点なのですが、全曹青、県、管区、本庁等の様々な研修を受けて思うのは流れに押されて少し焦りすぎじゃないかということです。

カウンセリング、教育、社会福祉、様々なケア等、すべて大切に必要です。現代

「一針一針、絡子を縫う」

三教区 田通寺 近藤俊彦

この度、高橋一浩老師の「指導のもと」随聞会「絡子を縫う」に参加させていただきました。随聞会「絡子を縫う」は毎日身に着けている絡子ですが、自ら作る機会は今迄なく大変貴重な場を設けていただき感謝しております。

昨年十一月下旬の第一回目。一枚の綿麻の布を前にして果たしてこれを一つの形に無事縫い上げることができたのだらうかと大きな不安を抱きつつ絡子作りは始まりました。裁縫道具は小中学校の家庭科以来ではないかと思つ程久しぶりに手に取り、チャームペンシルで微妙に曲がった直線を引き、慣れない返し縫いに何度もやり直しをしながらも地道に作業を進めていきました。

そして、回を重ねるごとに、裁断された長条短条の布は一針一針縫い合われ、縦と横に繋がった田相が現れると手を動かす楽しさと形になる確かな手応えを覚えるようになってきました。しかし縫い物

とは面白くも、少しずれても、まっすぐに縫い進めていくところからの縫い跡は

無残なジグザグ。性格がそのまま表れることを痛感しております。

また、かの道元禪師も蠟燭の灯りのもとで丁寧な針を縫い進めていたのだらうかと想像してみると、当時と道具や工程こそ違えど、時代を超えて同じ作業を行っているという事実に変な感慨深いものを感じました。

とは言ったもののこの原稿を書いている時点で第五回目を終えたところですが、牛歩の如くなかなか作業は進んでおりません。完成の喜びはもう少し先にありそうです。檀家さんの中にもぎん刺しやパッチワークを趣味とされている方が何人かおり、縫い物の話から「今、青年僧侶の集まりで絡子を縫っているんですよ」といつ話になると完成後ぜひ見せて欲しいとのこと。作成途中の絡子に目をやると……人前で胸を張って披露する出来にはなりそうにありませんが、「一針入魂」の成果だけでも何とかお見せできればと思っております。

全曹青出向記

WEB委員長 山田俊哉

全曹青に出向させていただきました。おおよそ一年半。その前は名前すら知らなかった全曹青、特に若い会員様にとってはそういう人も多いと思います。せつかくの出向、少しでも全曹青を知っていただくために、少しだけ書かせていただきます。乱文乱筆、ご容赦ください。(中略)私は執行部のICT担当庶務として配属されています。執行部には会計庶務、監事があります。庶務は今期は八名おります。多いのですが、それぞれ会計付き庶務、書記役庶務、そしてICT庶務と一応配役があります。ICTとはICTに「コミュニケーションが入ったもので、以前はICT委員会として独立していましたが、今期から広報委員会と執行部に分割されました。主にホームページ、サーバー運営、その他ネットに関する部分が執行部のICT庶務の役目となっています。この役割分担がまだ確立されていなく曖昧で私とし

庭」すべては、参加者に何らかの安らぎを
与えていたとの感想がありました。
自死遺族に限らず、大切な人を亡くさ
れた人の心の痛みに目を向けた法要のあり
方を考えてみたいと思います。それは劇
的な変化ではなく、人の苦しみ悲しみに
そと手をさしのべた目につかない変化かも
知れませんが。

第二十八回 随聞会 報告

～「絡子を縫う」～

昨年より「御袈裟」について様々な角度
より参学してきましたが、今年の「随聞会」
では、講師に横手市蔵伝寺御住職 高橋
一浩老師をお願いし、実際に絡子の縫い方
を六回にわたり研修 作製する運びとなり
ました。

第一回目は昨年十一月二十五日に開
催されました。当初は二回の予定でしたが、
大半の会員が初めての体験でもあり、また
日頃、針仕事を寺族の方々に任せてきり
のためか、思いつくように進まず計六回研修す
ることとなりました。

「絡子を縫う」研修の様子



ご指導いただく高橋一浩老師



祖師の行履を慕うは宗門の懐いであり
ますが、法衣一つを取り上げて立派に仕
立てられ、用意万端となっているのが現状
で、なかなかその道を修し研鑽することが
難しいのも事実です。今回、秋曹青で各会
員自ら心を込めて裁縫し運針することによ
り、祖師の陰影を見出し宗門の眞骨
頂を修行できたのではないかと思います。
一針一針縫い上げていくという行為がこれ
ほど尊いものだと感じられずにはいられま
せんでした。何でも手に入る現代にあつて
私達が忘れていた何かを考えさせられた
貴重な時間でした。

合 掌

の僧侶が避けて通れないにしても学ぶべ
きことであると思います。でも、そちらはか
りに目を向けすぎて、中途半端に色々な
研修を受けて…。もちろん、僧侶をそれな
がらカウンセラーをされたり、教師や様々
なお役をされたり、お仕事をされている方
もたくさんいらっしゃいます。が、皆が皆そ
の道のプロになれるかという…。

その前にまず、私たちはプロの僧侶であ
るのだという、一番大切な足元を改めて自
覚する素晴らしい今期の活動であったと思
います。お袈裟という最も大切なものを
通して。

講義だけでなく最後は絡子作りという
実技も、針を持ったのは小学校の家庭科以
来といつ私にとってはとても楽しく研修で
きました。

私は曹青の活動になるべく参加するこ
とで、多くの良き方々と知り合えました。
他教区の法要に行った時、知り合いがいる
ととても楽です。自己研鑽の為にも、また
お付き合いの幅を広げるためにも、会員の
方々には積極的に参加されることをお勧

めたいです。

会長はじめ執行部、会員の皆様、二年
間本当にお疲れさまでした。

秋田県曹青青年会事務局長

村 松 玉 宗

明石会長より事務局長をお願いされた
時には正直自分はこの大役を務めあげる
ことができるのか不安でいっぱいでした。ま
だ秋曹青の事や周りの事が分からない状
態からの始動であつたからです。しかし会
長はじめ執行部、会員、賛助会員、顧問の
皆様の温かい御支援や御協力のもと何と
か二年間の任期を全うできた事を深く感
謝いたします。

この二年間は布教化活動、児童食育
などの過去の研修と違ったフタンスで改め
て我々が頂戴している「絡子」「御袈裟」に
ついて研修を積んでまいりました。昨年度
は黄龍寺様の御袈裟の講義、長禅寺様に
は「正法眼蔵」「袈裟功德の巻」を水野先
生の本を参考にしながら懇切丁寧に教え

て頂きました。今年度に入ってから愛知
学院大学教授の川口高風先生にお越し
頂き、さまざまな宗派の御袈裟、絡子など
を実際に拝見することができ、また曹青宗
の御袈裟の変遷についても学ぶ事ができま
した。最後の研鑽の場として実際に絡子を
縫い始めてみましたが、日頃針と糸を持つ
ことに慣れていない我々では思う様には進
みませんでした。諦める事なく「コツコツと
自分の手で絡子を完成させる事ができま
した。蔵伝寺様には遠いところ何度も足を
運んでいただきまして本当に感謝申しあ
げます。

今我々僧侶が社会から求められている
ことは様々であり、その中でも特に大切な
のは「行」と「学」のバランスではないかと思
います。修行僧堂にいた時は偈文を唱えあ
りがたく頂戴して御袈裟をかけていたのに
今では歩きながらであったり、地面に置いて
あったりとその状況は決して宜しいもので
はありません。そんな中、この二年間の研修
は古佛が大切に護持してきた法衣の有難
さや尊さを改めて考えさせられました。

事務局の仕事は裏方ではありませんが、山の会員、賛助会員、顧問、また他県の会員の皆様との御縁を頂くことができました。研修同様の大切な機会を頂けたこと感謝申し上げます。今後も一会員としてこれからも精進して参りたいと思います。二年間御協力本当にありがとうございました。

大切な人を、自死で失った方々のための

第五回 祈りの集い報告



「祈りの集い」追悼法要の様子

去る平成二十二年十月二十三日(土)

午後二時半～五時、大龍寺様(男鹿市船川港船川字鳥屋場三四)を会場にお借りし、第五回「祈りの集い」が開催されました。始めに亡くなられた方々の冥福のため残された人の悲しみが少しでも癒えるように、そして自ら大切な命を絶つ人が少しでも減るようにとの思いを込めて、追悼法要が、秋曹青会員のものと営まれました。

次いで、藤里町 月宗寺御住職、袴田俊英老師に法話を頂戴しました。老師は現代は時間は過ぎ去っていくものとされ、そのような生き方が良しとされている。時間を貯めていく、重ねていく生き方が大事なのではないか。

時間の蓄積

「今」が大事とわかる。蓄えられた時間の上にある「今」を大切に生きるよう。



月宗寺住職 袴田俊英老師による法話

先になくなった方から何を教わっている

のが、今はわからないかもしれないが後に分かるはず。少し悲しい時間を過ごしてきた人は、間違いないで優しくなれる。それは私たちの成熟に大切な時間なのだ。」と優しく口調でお話下さいました。



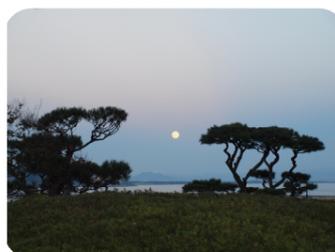
大龍寺様伽藍



涌井真弓氏



コントラバスの演奏



次に会場を客殿に移動し、秋田グリーンケア研究会 涌井真弓氏のコーディネートで茶話会(分かち合いの会)を設けました。

また、地元「おひい工房 珈音かのん」さん御協力でおいしい「トピト」と、佐藤毅さんによる素晴らしい「コントラバスの演奏を披露していただきました。

祈りの集い「よせて」

秋曹青ボランティア委員長

男鹿市 大龍寺 三浦賢翁

「祈りの集い」が秋田の曹青で始められて十年、今回で五回目となりました。回を重ねる毎に私達も傾聴などの研修を受け、遺族の話も聞かせていただき、曹青会員の自死、自死遺族に対する意識も少しずつ変化してきたのではないのでしょうか。

私も自死なるが故に受ける遺族の苦しみがたくさんあることを知りました。心ない偏見や非難に直面し心を凍結する人。何よりも自分が傷ついているにも関わらず「なぜ止められなかったのか」とさらに自分を責める人。鉄道や賃貸住宅での自死で賠償請求されるといった問題を抱えていることが多いと。周りの人は励ましと思っ

てかけた言葉にかえって傷ついてしまうことが多いと。遺族が何の気兼ねもなく安心して話せる場が少なく、だから人の痛みを心にかけて聴く傾聴が大切あること。

今まで考えもしなかった自死の周辺にあるさまざまな苦しみを多くの人が知り、理解することは偏見や差別の抑制につながると思います。しかし、現実を知り分析して因果関係をつまびらかにすることはだけでは人は救われなれないとも知りました。

「私を癒したのは、なによりも同じく心に傷を負う仲間の理解と励まされた」といつ声を聞きました。心の傷を和らげられるのは、人の温もりと息づくものやさしさだと思えます。

一人の自死の周辺には、親、配偶者、恋人、兄弟、子供、友人など、さまざまな人たちがいます。自死の多い本県にあってはその数ははかり知れませんが、そしてその心に傷を負った人たちが今、同じように心に深い

傷を負った人の気持ちを安らかにしようと様々な活動に参加されています。そしてそれは自分自身の心の救いにもつながっているのだそうです。

一回目の「祈りの集い」以来、自死に関する研修や活動に参加させていただきました。また自死を含め何らかの深い心の傷を負っている人でした。人の傷を癒すことができるのは、心身ともに剛健なスーパーマンではなく、自ら傷を負い心の痛みを知っている人ではないのでしょうか。

ところで最近葬儀が簡略化されてきているといいますが、遺族の悲しみ、苦しみが減少したわけではなく、中にはそういって人もいるかも知れませんが、依然として心の救いを必要としていると思えます。

葬儀や法事、三仏忌、彼岸会やお盆、食会など伝統的仏教行持は、元来このよ

うな人々の心を救済する働きを持っていると思えます。

今回の「祈りの集い」のアンケートでも、「読経の声」、「法話」、「茶話会」、「本堂や